

会 議 記 録

名 称	中央区基本構想審議会安心部会（第3回）	
開催年月日	平成28年6月13日（月）18:30～20:30	
場 所	中央区役所本庁舎3階 庁議室	
出 席 者	委 員	和気康太（部会長）、榊原美樹（副部会長）、押田まり子、渡部博年、青木かの、鹿島新吾、中野耕佑、小林高光、三田富貴子、市川尚一、中山華子、松本紗智、齊藤進
	幹 事	田中武（総務部長）、黒川眞（福祉保健部長）、古田島幹雄（高齢者施策推進室長）、中橋猛（中央区保健所長）、濱田徹（企画財政課長）、吉原利明（総務課長）
配布資料	中央区基本構想審議会安心部会（第3回）次第 中央区基本構想審議会「安心部会」委員・幹事名簿 中央区基本構想審議会安心部会（第3回）座席表 資料1 他道府県の方々から見た中央区（インターネットアンケート調査） 資料2 第2回部会でのご意見等を踏まえた対応状況について 資料3 中央区基本構想審議会安心部会 現況と課題（新旧対照表） 資料4 中央区基本構想審議会安心部会 施策の方向性（素案）	
議事の概要	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 開会</li> <li>2 議題 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 他道府県の方々から見た中央区について</li> <li>(2) 第2回部会でのご意見等を踏まえた対応状況について</li> <li>(3) 中央区基本構想審議会安心部会 現況と課題（修正案）について</li> <li>(4) 中央区基本構想審議会安心部会 施策の方向性（素案）について</li> <li>(5) その他</li> </ol> </li> <li>3 閉会</li> </ol>	

## 1 開会

事務局から、中央区議会議長の交代に伴う押田まり子委員の就任を報告。  
和気部会長および松本委員が遅れての出席となる旨の連絡。  
配布資料の確認。

## 2 議題

### (1) 他道府県の方々から見た中央区について

みずほ総合研究所株式会社から、資料1「他道府県の方々から見た中央区（インターネットアンケート調査）」を説明。

榊原副部会長 質問等があればお願いしたい。

私から1点お伺いさせていただく。他区市町村等で類似調査が実施されているか、実施されていれば、中央区独自の結果があるかの比較ができるかお聞かせいただきたい。

みずほ総研 23区については、港区と葛飾区において、区外を対象としたインターネットアンケート調査を実施している。港区は結果が公表されていないため、比較はできない。葛飾区については、観光調査の中で実施しているため比較はしづらいが、中央区独自の結果がある場合にはご報告させていただく。

鹿島委員 「Q13. 今後中央区に住んでみたいと思うか」について、「住んでみたい」が8.5%しかない。今の中央区ではビル等が多く建っており、住んでみたい方がいるからビルが建っていると思うがいかがか。

みずほ総研 推測も交えてのご回答になるが、この調査は生活の中で中央区と接点のない方を母数としている。よく耳にする話では、人が住みたいという希望は、もう少し深い関わりを持っているところに対して生じるため、1都3県居住者を除いた本調査では、「住みたくない」や「わからない」が多くなったと推測している。

齊藤委員 今の回答の補足をさせていただく。中央区への転入者は江東区が一番多く、港区、横浜市と続いており、ある程度中央区のイメージをお持ちの方が多い。1都3県居住者以外となると、どんな所か分からないということが先に来ている気はする。

中野委員 「住んでみたくない理由」についてはアンケートを取っていないのか。

みずほ総研 「Q13. 今後中央区に住んでみたいと思うか」に「住んでみたくない」と回答した方に対しての理由は直接的には聞いていない。関連する設問として、「訪問したくなるまち」、「住みたくなるまち」の条件を伺っており、「自然や緑があるまち」との回答が多かった。中央区は外部の方からは都会というイメージを持たれており、自然が少なく人が多いまちというイメージから敬遠されたと推測される。

榊原副部会長 外部の方が中央区のことが分からない中で、緑が少なく、人が多いために住みたいとは思わないというのは既にそのようなイメージになってしまっているということである。そこをどのように打ち出していくかといった話にもなるかと思う。

### (2) 第2回部会でのご意見等を踏まえた対応状況について

### (3) 中央区基本構想審議会安心部会 現況と課題（修正案）について

事務局から、資料2「第2回部会でのご意見等を踏まえた対応状況について」および資料3「中央区基本構想審議会安心部会 現況と課題（新旧対照表）」を説明。

榊原副部会長 質問等があればお願いしたい。

市川委員 資料3「中央区基本構想審議会安心部会 現況と課題（新旧対照表）」の2ページ、「(ア) 感染症対策」の文章において、「中央区」と表記しているが、他はすべて「本

区]となっているため、修正をした方が良い。また、「予防方法の普及啓発や、患者発生時の調査、検査、および保健指導などの確実な対応が必要です。」の部分は「予防方法の普及啓発や、平時よりの情報の(適切な)共有化、そして患者発生時の調査、検査」とした方が良い。新興・再興感染症等があった場合に余計な混乱を招かないことが大事な点だと思う。

神原副部長 「施策の方向性」についてご発言いただいたが、そちらは後の議題になる。この議題では、前回ご発言いただいて、修正された部分についての質問やご意見を伺いたい。進行に不手際があり申し訳ない。

青木委員 前回のLGBTについて記載すべきではないかとの意見への対応として、「心のバリアフリー」と「多様性」について記載をしていただいているが、LGBTの問題はこの2、3年で一般的に取り上げられる問題となるため、あえて言葉で入れていただきたいという思いがあった。

事務局 資料3「中央区基本構想審議会安心部会 現況と課題(新旧対照表)」の5ページ、下から4段落目で「一人ひとりが個人の尊厳を尊重し、年齢、性別、国籍、障害の有無などの多様性を認め合う」と記載している。様々な言葉が並んでしまうのはどうかと検討した結果、こちらの「性別」にLGBTのことを含むという扱いをさせていただいた。地域によっては話題性があるものだと思うが、事務局が把握した限り、本区においてはLGBTに関する区民からのご意見としては今はほとんどない状況である。社会一般的には問題となる言葉だが、本区の基本構想として入れるかを検討した結果、このような形となった。

青木委員 今おっしゃった、中央区では問題になっていないという点が問題である。表面化していれば問題解決の方向に行くが、表面化していないからといって、LGBTの方が中央区にいないわけではない。LGBTの問題はいじめにつながるなど、教育の問題ともつながってくる。そのため、ここで「LGBT」という言葉を入れることにより、LGBT教育をすることを再考いただければと思う。

齊藤委員 青木委員のお話はよく分かるが、共生という中で差別をいかに捉えるかという点において、差別の種類は多種多様であり、1つずつすべて挙げていくかどうかということになる。中央区としてどこをターゲットにするかという中では、包括的な書き方はさせていただいている。様々な差別がある中でその中の1つについてLGBTという形で記載することが全体の基本構想においてふさわしいかと言うと、他の差別との比較の問題が生じてしまう。すべて羅列することもまた違うと思うため、私はLGBTの記載はなくても良いと思う。

#### (4) 中央区基本構想審議会安心部会 施策の方向性(素案)について

和気部会長 資料4「中央区基本構想審議会安心部会 施策の方向性(素案)」の1つ目の大項目「すべての人々が健康であるために」について、意見をお願いしたい。

松本委員 「(1) 現況と課題」において、「このため、妊娠期から幼児期までのきめ細かで一貫した」とあるが、母子の健康支援対策は幼児期までと限定されているのか。子育てはその先もつながっていくため、先に続いていくような含みを持たせた書き方がより良い。前回発言させていただいた、「小1の壁」といったものも含め、全体的な皆さんの心も体も豊かにしていけるような含みを持たせた方が良いかと思う。

事務局 この書き方はフィンランドの「ネウボラ」という妊娠期から幼児期までの一貫支援から来ているものであるため、青年期までといったことは考えていない。

松本委員 青年期までということではないが、次の大項目の「2 誰もがいきいきと暮らしていくために」においては学齢期についても触れており、含めた方が良く思った。

事務局 「ネウボラ」をイメージして書いているので、それを学齢期まで伸ばすことに問

題はない。

齊藤委員

様々な子どもの課題をいかに早期発見し、健康を維持できるかという点においては乳幼児期が大切だということで、このような書き方をした。学齢期になると学校の健康診断や、学校の先生といった両親以外の様々な目が入るため、課題に目が届きやすいという意味で「妊娠期から幼児期まで」としているだけである。よって、おっしゃる趣旨に変えることは問題はないと思う。

松本委員

他の皆さんも特に異論がなければ変えていただきたい。

齊藤委員

検討する。

中野委員

「加えて、区民への意識調査によれば6割以上がストレスを感じており」とあるが、人間は誰でもストレスを持っており、あえて「6割以上」と書くと、中央区民であるがゆえにストレスが多いと受け取る方もいる気がする。先週のテレビ番組では全国民の63%はイライラ感を持っていると伝えており、わざわざ載せる必要はないかと思う。

和気部会長

中央区だけが突出して高いのか。やはり都会に住むとストレスが多く、郊外が良いという深読みまでされてしまうと困る。

押田委員

具体的に「6割以上」と記載していることがネックである。「ストレスを抱えている」と言う表現を変え、「心の病気」につなげた方が良い。その辺りを直せば文章もより生きてくると思う。

事務局

心のケアの必要性を言及したかったための表現であるので、工夫を考えさせていただく。

三田委員

「このため、かかりつけ医、歯科医、薬局の普及」とあるが、ここに「歯科医」を持ってきた意味はあるのか。

和気部会長

薬剤師については、かかりつけについての方針を出していたと思う。これだと医者だけが「かかりつけ」なのかと見える。

事務局

「かかりつけ歯科医」、「かかりつけ薬局」といった意味での記載である。

三田委員

であれば、「かかりつけの」と表記した方が良い。

齊藤委員

表現を直した方が良い。

渡部委員

「・」で区切った方が良いと思う。

市川委員

かかりつけの「医師」と書くのであれば、「歯科医師」、「薬剤師」と文言を統一しなければならない。

和気部会長

人で統一することとしたい。

「日本を代表するにぎわいのまちであり食文化の拠点でもあります。」との表現は良いと思うが、「このため、こうした区の特性を踏まえて生活衛生の向上や感染症対策に取り組みながら」とすると、食文化の拠点であるため、衛生が悪い、感染症が出ていると読めなくもない。間にもう1つ2つ入れるものがあるのではと思う。

渡部委員

「6割以上がストレスを感じており」の部分を修正することだが、その部分を調整した上で、生活衛生、感染症対策の文章につなげていった方が素直になると感じた。

和気部会長

意見を踏まえて、文言整理、調整をしていただきたい。上段はストレスを感じているから心の病気があり、緩衝するために環境を変える必要があるという長期的な対策について記載していただく。下段は、中央区は東京の中心で玄関口となっているため、感染症が入ってくる危険性が高いという意味で、短期的な危機管理体制の強化をする必要があるという記載になる。長期的なもの短期的なものを考えれば良いと思う。

松本委員

「(7) 母と子の健康の確保・増進」の部分に「核家族化の進行等により乳幼児と接する経験のないままに」とあるが、少し違うような気がする。

- 三田委員 私も違和感を感じる。
- 榊原副部長 ないことが悪いように読めてしまう。
- 三田委員 決めつけ的な表現のような気がする。
- 齊藤委員 皆、基本的には乳幼児と接する経験はない。
- 松本委員 仕事にされている方以外は難しいと思うので、表現を変えていただいた方が良い。
- 和気部長 3世代家族なら子どもと接する機会があるかという点、祖父母と接する機会はあるが、子どもはないと思う。子どもと接するというのは地域の話になる。
- 齊藤委員 趣旨からすれば、ご両親がいれば、ご両親に子育て経験はあるということだが、育てる本人には結局経験はない。核家族化の進行はポイントとしてあるが、この書きぶりは直さないといけない。
- 和気部長 異論があったのでこの文章は変えていただく。近くにご両親や祖父母がいれば、知恵を授けてもらえ、簡単に無償で預かってもらえるなどの「ソーシャル・サポート」が受けられる。3世代同居や、コミュニティでのそのようなサポートがなくなってきており、子育てをする方が社会的に孤立しているという話である。そういった問題はあるため、何とかしなければならない。
- 齊藤委員 「特別な配慮を必要とする家庭」との記載があるが、最近はこのような書き方をするのか、具体的には何を指しているのか。
- 和気部長 児童相談所の関係で、保護者の養育力等の様々な課題がある場合に「特別な配慮を必要とする家庭」という言い方をしている。また、両親に様々な課題があり、子育てができない際に保健師が援助をするという形で、「特別な配慮を必要とする」という使い方をしている。確認をしてより良い言葉があれば修正をする。
- 榊原副部長 最近そのような言葉を使っているのであれば修正の必要はない。
- 事務局 「(り) 安全・安心な医療の確保」において、「診療所、薬局などへの適切な監視指導を通じて」とあるが、「監視指導」という言葉が少しきつい言い方のように思う。
- 齊藤委員 一般的にはこのような言い方をするため、柔らかくするのであれば、「指導」とする。
- 和気部長 将来的な話からすれば、監視社会のような言い方よりは、「協働」や、「連携して」、「協力して」といった一緒にやるという雰囲気が出た方が良い。未来志向で表現を直したい。
- 松本委員 20年の期間があれば、温暖化が進み、南方系の病気が出てくるのではないかと。気候が温帯ではなく、亜熱帯か熱帯に近くなる。すでにデング熱の話も出てきており、感染症対策として、そういったものが恐らく出てくる。これまでにない南方の感染症が蔓延する可能性があり、中央区は出入り口にあたる可能性があるため、気を付けなくてはならない。そのような文言を長期的な視点で入れるのはどうか。
- 事務局 「共働き世帯の増加や就労形態の変化」とあるが、「就労形態の変化」とは具体的にどのようなものか。「変化」と言うと、何かが変わってしまうとを感じる。「多様化」という表現を後で使っているために、ここで「変化」と表記しているのかと思った。
- 和気部長 おっしゃるとおり、後で「多様化」という言葉が出てくるためである。ここで言う「就労形態」とは、雇用形態や実際の勤務形態のことである。シフトでの夜間勤務など、人の働き方がさらに多様化していることを表現したいと思っている。
- 松本委員 前段で「就労形態の多様化」という言葉を使うのであれば、後段は「高度化」とすれば良い。福祉の領域では「ニーズが高度化する」といった形で、より要求が高くなっていくという意味で、「多様化」とセットで使っている。
- 和気部長 その方がイメージに近い。
- 事務局 では、その方向で検討していただきたい。
- 齊藤委員 20年後にどのような変化が起きているかという点が難しい。それが健康にどう映

るかという話になる。若返りの薬や、がんの克服、アルツハイマーの特効薬といったものが出てくると、状況は一変する。ただ、あまりいい加減なことも書けないと思う。

齊藤委員 楽観主義ではなかなか書けないものである。

和気部会長 2つ目の大項目「誰もがいきいきと暮らしていくために」について、意見をお願いしたい。

榊原副部会長 ここでは福祉サービスなどを中心としたことが書かれていくことになると思う。これまでの会議において、中央区の人口が今後10年、20年のスパンで増えていくという話を聞いたが、そうなるとう当然福祉サービスを必要とする人の量も増加する。中央区は土地が限られている中で、必要な施設整備が可能であるのか。個別の計画での対応になる部分はあると思うが、その点の記載がここではまったくないため、お考えをお聞きしたい。

事務局 施設整備には場所の問題もあるが、本区ではまちづくりという意味では進化し続けているまちでもあるので、再開発の機会を捉えてといった可能性はあると思う。ただ、ここはソフト的な書き込みのパートであると認識していたため、施設的な言及についてはそれほど含まれていない。

榊原副部会長 他部会において、そのような多様な視点を持ったまちづくりを進めていくと記載される可能性はあるということか。

齊藤委員 3部会に分かれて議論をしているので、今おっしゃっていただいたことが、漏れそうであればフォローする。区が単独で土地を買い、その上に建てるという話は実質的に難しいところがあり、必要な施設は民間の力を使いながら作っていく形になる。その意味では、現時点で先に数字を出すことが難しい。既に計画されているハード面については当然やっていくが、今後については、基本構想を策定した後に基本計画の中で具体的に話を詰めながら検討していくことになると思う。

事務局 資料4の4ページ下部の保育の部分に関しては施設という言葉が入っているが、全体を見通して、調整させていただきたい。

和気部会長 20年後であれば、児童、障害、高齢者という発想は消えている可能性がある。地域包括ケアという言葉が出てきており、それを進めようとしている。現状では高齢者の領域から始めることになっているが、障害者、児童、生活困窮者についても追従していき、地域福祉という形で再編されていく可能性はあるのではないかと。

また、高齢者が圧倒的多数を占めるため、スーパーやマンションと一体化した老人ホームが出てくる。民間のデベロッパーもそのような設計の下でまちづくりが始まっている。差別や偏見がなくなり、老人ホームのような福祉施設や障害者施設もバリアフリーになり、まちづくりの際に当たり前に設計されていくようになると思う。その辺りは少し大胆に考えても良い。

榊原副部会長 施設整備については、従来型のものをつくるよりは、新しい発想で記載をした方が良い。事例として、デベロッパーが多様な人が移住してくるまちをつくり、その中で支え合いを形成する取組も始まっている。若者は安く住めるが、高齢者の手伝いをする、高齢者も公共施設の受付等の働く場があり、多様な施設に福祉機能が付いたものができてきている。中央区でも新しい形のものでできていくようになれば良いと思う。

和気部会長 未来像として、榊原副部会長がおっしゃったようなものを出して、様々なものが入ると、夢もロマンもある。今の老人ホームをひたすらつくるといった発想は変えた方が良くと思う。

私の専門領域では、サービス付き高齢者住宅という形で芽は出てきている。従来

の老人ホームと在宅介護の中間で、簡単なサービスが付いた高齢者専用の居住施設である。そのようなアイデアは少しずつ出てきており、民間のデベロッパーもそのような形でやっていただけるとありがたい。

松本委員 様々なコミュニティを多様な方々で築いていくということであれば、子どもに関してもそれに絡めて作っていただいても良いかと思う。現状の記載では、これまでどおりの保育施設等をつくっていくという書き方に終始していると思うので、新しい話を入れても良いと思う。

齊藤委員 今いただいた話は、町のデザインや都心としての生活の仕方に関わる部分であり、必ずしも安心部会だけの話ではないと思うため、記載する場所を考えさせていただく。

和気部会長 確かに区全体のデザインの問題になってくる。子どもについては、駅の中に保育所をつくるといったことも出てきている。このようなものが広がる可能性は20年経つとあり得る。

市川委員 最後のページについてだが、そこに行っても良いか。「② 共生社会の推進」において、「(ア) 障害者理解と共生」と「(イ) 動物愛護」が並列になっていることに違和感を覚える。これは別項目にした方が良いのではないか。

齊藤委員 区としては共生社会を広く捉えている。その意味では当然、障害者理解としての共生もあるが、災害時のペットの問題の中で、ペットを家族として扱う高齢者も増加しており、そのような方も一緒に生活ができるようにという意味での共生ということである。動物愛護についても力を入れ、共生社会の1つという認識であるが、ランクが違うと言われると否定はしにくい。

和気部会長 記載する場所がないということか。

齊藤委員 動物とどう過ごしていくかは課題としては非常に大きくなっている。人との関わりは難しいが、動物となら幸せに暮らせるという方も一定数いる。

市川委員 動物愛護を④として記載するのはどうか。

齊藤委員 工夫をさせていただく。

中野委員 市川委員の発言に私も賛成である。前回ペットの防災対策について述べさせていただいたが、私も市川委員がおっしゃったニュアンスを含めて言ったつもりである。

榊原副部会長 「3 互いに尊重しあって生きていくために」の「(1) 現況と課題」では「年齢、性別、国籍、障害の有無などの多様性を認め合う「共生社会」と書かれているが、「(2) 施策の方向性」では、「(ア) 障害者理解と共生」と、障害者に限定されている感じがする。青木委員がおっしゃったLGBTの話も含め、特出しするかはともかくとして、もう少し障害者だけに偏らない書きの方が良いのではないかと思う。

和気部会長 障害者の方に特化されているところがないわけではないが、共生社会はすべてに係るものである。

齊藤委員 かえって共生らしくない。

和気部会長 限定せずに整理していただく。

今は介護ロボットが始まっており、20年後であれば、ロボットの話が出てくるのではと感じているが、どこにも記載がない。老人ホームの姿も変わるのではないかと思う。20年後であれば、ロボットとの共生という話が出る可能性はあるのではないか。サービスの中で少し書きぶりを入れた方が良いかもしれない。

事務局 検討させていただく。

押田委員 表現が難しいかもしれない。

渡部委員 技術革新ということだろうか。

和気部会長 3つ目の大項目「互いに尊重しあって生きていくために」について、意見をお願い

いしたい。

青木委員

男女平等という言葉はもう使われず、男女共同参画という言葉さえ古く感じるが、そのような記載が多く出てくる。「男女雇用機会均等法などの規定が整備されたことや、男女の意識改革が進み、家庭の中での役割分担が見直されている」や、「こうしたことから、男女が、家事、育児、家族の介護等すべての家庭生活において責任を分かち合うとともに」といったことは普通のことになる。つまり、男女で分けること自体がおかしい。「③ 男女ともに仕事と生活を両立し活躍できる社会の構築」において、「男女がともに仕事と生活を両立できるようにするため、ワーク・ライフ・バランスの推進」とあるが、ワーク・ライフ・バランスの推進に絞った方が良いという気がする。最後に「地域コミュニティの活性化は不可欠であるため、女性団体の地域活動への参画など女性と地域との関わりを通じて、女性の活躍の場を拡大していくことが重要です。」とあるが、20年後にこれを読むとするといかがなものかと思う。

事務局

前段の7ページから8ページにかけては現状分析を書かせていただいている。昨年の暮れに出た国の「第4次男女共同参画基本計画」や、今年2月に出た東京都の「女性活躍推進白書」や「女性活躍推進法」などのデータを見ても、背景や課題は変わっていないと感じた。20年後にどこまで行っているかは課題ではあるが、今回いただいた意見をもとに書き直させていただく。

和気部会長  
齊藤委員

そういった面では劇的に変わりつつあるのではないか。

LGBT を直接的に出さなくとも、「男女」を強調するのはアンチになってしまうので気を付けなくてはならない。

押田委員

はじめに年齢も性別も関係なくと書いておきながら、「男女」と出てくるのは矛盾していると思う。あまり女性を弱者扱いすると今の女性は怒る。女性・男性の前に人間であるという扱いをした方が良いと思う。

渡部委員

同じ人間であるのでそのとおりにかと思う。

押田委員

最初にそううたっているのであれば、最後まで貫いてほしいと感じる。

和気部会長

大学も、社会福祉学科は女性の人数の方が多くなっている。社会福祉学の世界では女性が赴任してくるのは普通のことになっており、20年の間に大きく変わっている。

榊原副部会長

8ページの「(7) 権利擁護・虐待防止」における「そのため、権利擁護の利用については「権利擁護の仕組みや制度の利用」の方が普通の表現ではないかと思う。

事務局

検討させていただく。

松本委員

「(1) 現況と課題」には「子育て世代」といった言葉があるが、「(2) 施策の方向性」には子どもを想定した項目がない。ユニバーサルデザインなどに関わってくるかと思うが、「子ども」といった言葉が抜けているがいかかか。

事務局

「(7) 権利擁護・虐待防止」において、主に虐待の問題が今後も心配されるため、そのような形で記載している。

和気部会長

「(1) 現況と課題」において、児童虐待は子どもとしての尊厳が守られていないことを最もシンボリックに表していることであり、大きな問題だと思うため、記載して良いと思う。

事務局

「(1) 現況と課題」と対応するよう表現をそろえる。

和気部会長

「1 すべての人々が健康であるために」と「2 誰もがいきいきと暮らしていくために」では子どもや子育ての話が項目として入っている。その流れであれば、「3 互いに尊重しあって生きていくために」においても触れる形で、注意している、配慮しているという書きぶりにした方が良い。

鹿島委員

全体的に、子どもに関する記載は多いが、高齢者に関する記載が少ない。



- 松本委員 バランス的に、子どものことをお伝えできる人間が少ないために発言させていただいている。高齢者に関してもご発言いただければ、私も同感とする。
- 鹿島委員 我々高齢者も子どもの話は町会などでよくしている。「(イ) 動物愛護」において、防災拠点の取組を行っているが、動物の取扱いは問題になっている。動物が嫌いな人もいるので、動物を預かる施設を別に作らなければならないという話にもなっている。子どものことを見捨てていないわけではない。
- 松本委員 皆さんに子どものことを見ていただいているという実感はあるので、見捨てているとは思っていない。文章の中に含めていただけたら良いという意見である。
- 渡部委員 子どもは発言する機会が少ないため、このような場で言わなくてはならないということはあると思う。鹿島委員のおっしゃるように、地域の高齢者の方がしっかりと面倒を見ているとは思いますが、施策に反映するとなると、子どもを持つ親に発言いただく方が良いと感じる。
- 鹿島委員 意見は良いが、文章の中で少ないということである。
- 渡部委員 高齢者に関しては5ページ下部から次ページまで記載がされている。
- 三田委員 これは「社会の第一線でいきいきと活躍できる地域づくりが求められます。」とあるように、高齢者はいつまでも元気で頑張れとエールを送るような内容である。
- 小林委員 シルバー人材センターの将来像を語るのと同じようなことである。
- 渡部委員 そのような方がいないと地域の歴史も文化もない。
- 鹿島委員 話が変わるが、警察の方から、小学校において悪意のない万引きの問題があるという話を聞く。
- 渡部委員 そこも地域力で支えなければならない。
- 和気部会長 子どもに関しては厚生労働省の予算も少なく、基本的には家族の中で自助でやるという部分が強かった。社会全体で見えていくためには、基本構想で記載をしてアピールする必要はあると思う。中央区は子ども、子育てを大事にしていることをアピールする意味では1つの柱として入れて良いかと思う。
- 高齡者に関してはずいぶん進んできているため、元気な高齡者を増やすということになる。
- 三田委員 参考資料2「区民意識調査「近隣に家族や助け合える友人・知人の有無」に関する詳細結果」において、50歳代で居住年数が5年以上10年未満の方の「いない」割合が81.8%と高いことが気になる。原因が分かればお聞きしたい。
- 我々、女性団体は企画や行事をしていく上で、近年は若年者に視点を当てて計画を進めてきたが、50歳代で地域のコミュニティに入っていない方が多いとなると、そちらの方々をいかに吸い上げていくかを今後の事業で考えなくてはならないと感じた。
- 事務局 推測になるが、50歳代は子育てが一段落し、学校などのコミュニケーションが少なくなる。60歳以上となると、高齡者としてのコミュニティが形成されていくが、その狭間の時期であると感じる。
- 齊藤委員 40歳代の後半で中央区に入り、5年以上10年未満の居住年数となると、働き世代としては地域との合流は難しいことが調査結果から感じられる。この層をいかに拾うかとなると、地域との関わりがないため、難しいかもしれない。
- 押田委員 町会に長く関わっているが、30歳代、40歳代は学校のつながりがあるため、まちとの関わりもある。50歳代になり子育てがなくなると、まちにデビューされない方が多くいる。60歳代を過ぎるとまちのことを手伝う時間ができてくる。50歳代は仕事熱心で子どもがおらず、まちとの繋がりが少ない世代が比較的多いと思う。
- 渡部委員 出生率や出生数の関係で子どもの数も少なかったのではないかと。
- 押田委員 町会には60歳を過ぎた方か、子どもが学校にいる青年部の方が出てくるが、その

狭間の方々であると感じる。

和気部会長 地付きの方が途中で転入された方かで違いがあると思う。転入されて高いマンションを購入されている方はなかなか付き合いがなく、地付きの方は子育てが終わったという、今お話しされた理由であると思う。居住年数を見るとさらに詳しく分析できるかと思う。

中野委員 「助け合える友人・知人」の「助け合える」とはどの程度の範囲を想定しているのか。言葉がアバウトな印象を受ける。

事務局 設問上は範囲の定義付けはしていない。人によっては多少受け止め方が違うかもしれない。

齊藤委員 その人にとって助けてもらえる人がいるという安心感が大事であって、受け止め方はそれぞれで良いと思う。地域の中で助けてもらえる人がいるという感覚が高まればよく、具体的なことはこの問いでは求めていない。そこで安心して生活してもらえれば良いということかと思う。

和気部会長 学齢期の話があまりないように思うが、中山委員に話を伺いたい。

中山委員 学生の立場で見えてはいなかったので内容が変わるが、地域包括ケアシステムを始めるとなると、20年という期間は短いと思っている。区としてそれに向けての対策が行われているのか。新しい方が地域に入ると、町内会での問題が出てくると思うので、その点においてどこまで地域に介入していくのか。

事務局 地域包括ケアシステムはあらゆるものが一体的に提供される地域づくりを進めることである。平成37年には団塊の世代がすべて75歳以上になるため、全国的にそのようなシステムをつくっていかうとしている。現状、特に力を入れているのは、社会参加、健康づくりである。高齢者の懇談会を設け、今年から「通いの場」という高齢者が気軽に立ち寄り、活動できるモデル事業を実施しており、来年度以降本格的にスタートしたいと思っている。

また、認知症対策においては、地域でケアをしていくシステムを作る必要があると思っている。介護と医療の連携で早期発見、早期対応ができる認知症ケアチームをつくることを考えている。また今年も、認知症になった際にどのような対応をすれば良いのかが書かれた認知症ケアパスを作成し、65歳以上の方がいる全世帯に配ることを予定している。

住宅においても新たなサービス付き高齢者住宅を誘致して建てていくなど、様々な面から土台づくりをし、10年後に向けての対応を図っている状況である。

齊藤委員 「通いの場」について補足をさせていただく。運営自体を地域で行ってほしいと思っており、運営者を育てているところである。このようなことを地域に広げ、自分たちで元気高齢者として活動する場を各地域につくることを考えている。

鹿島委員 分譲マンションの方は町会に入るが、賃貸の方はほとんど入らない。催し物をすると子どもは出てくるが、普段は町会費を払っていないという意見も町内ではある。

和気部会長 中央区にも様々な課題があることが改めてよく分かった。

地域包括ケアシステムについては、20年後に向けてのはじめの一步が始まった形である。

学生に関することもあって良いかと思う。学生も住みやすく、行きたいと思ってもらえるまちが良いと思う。大学を卒業したら他に行ってしまうが、その間は楽しく安心して住めるまちだということが少しあっても良いと思う。

## (5) その他

質疑等なし

### 3 閉会

和気部会長の閉会宣言により終了。